# ハーディのユーモア感覚「羊飼いが見たもの」に見られるユーモア―

# 宮崎隆義

Hardy's Sense of Humour

— Humour in 'What the Shepherd Saw' —

MIYAZAKI Takayoshi

言語文化研究 徳島大学総合科学部 ISSN 1340-5632 第 24 巻 別刷 2016 年 12 月

Offprinted from Journal of Language and Literature
The Faculty of Integrated Arts and Sciences
Tokushima University
Volume XXIV, December 2016

# ハーディのユーモア感覚 --「羊飼いが見たもの」に見られるユーモア--

### 宮崎 隆義

# Hardy's Sense of Humour — Humour in 'What the Shepherd Saw' —

# MIYAZAKI Takayoshi

### Abstract

'What the Shepherd Saw' (1881) in A Changed Man, The Waiting Supper and Other Tales (1913) by Thomas Hardy (1840-1928) is kind of a Christmas story like Charles Dickens's well-known Christmas stories. This story is certainly a weird one about a scary murder committed and witnessed on some part of Wessex downs. With well-constructed structure and calculated foreshadowing, this story is an excellent one in terms of narrative techniques. Furthermore, this story contains some kind of humour in the tense scenes.

Hardy is still now regarded rather fixedly as a writer of tragic and pessimistic novels, stories and poems. This conventional image of Hardy is put in doubt if we read this story carefully. Hardy started writing novels with an acute critical eye on the society of class consciousness and on Christian religion; therefore, his works are in a sense full of satirical and ironical treatment of the then society and its system, and the religious state

of mind of the people at that time. One of his earliest novels, however, *Under the Greenwood Tree* (1872), whose title is from the song in the Wood of Arden in Shakespeare's comedy *As You Like It* (1599), is a pastoral novel with some tint of pathos and humour. Hardy was as an ambitious writer with a keen consciousness of narrative techniques and seems to have tried every mode of narratives including humour, which element is as it were an undercurrent even in the most tragic novels like *Tess of the d'Urbervilles* (1891) and *Jude the Obscure* (1896).

Focusing on Hardy's sense of humour might lead us to be aware of the hidden quality of humour in his novels and stories, and would contribute to a reevaluation of his writings in general. In this paper, 'What the Shepherd Saw' is discussed and analyzed from the point of Hardy's sense of humour and narrative techniques with the attention to linguistic characteristics in the story.

I

トマス・ハーディ(Thomas Hardy, 1840-1928) の短篇集『変わり果てた男』(A Changed Man, The Waiting Supper and Other Tales, 1913)に収められた,「羊飼いが見たもの」(\*What the Shepherd Saw', 1881)というクリスマスに発表された作品は、クリスマスの時期にふさわしく聖書の一節を想起させるタイトルを掲げながらも、嫉妬ゆえに衝動的に行われた殺人の現場を目撃したという、異様な雰囲気と内容を持つ作品である。だが、おぞましい殺人というものを扱った物語でありながら、クリスマス物であるがゆえに、そこはかとないユーモアを秘めており、それが物語の緊迫感の中で絶妙な効果を生み出していて、クリスマス物の作品としても秀逸なものとみなしてよいだろう。

クリスマスの時期に、ゴーストにちなむ物語が好まれて発表されたのは、ディケンズが始めたクリスマス特集の物語が始まりとみなしてよいが、この物語もあの『クリスマス・キャロル』(A Christmas Carol、1843)のように、いわゆるゴースト物として、結末部ではゴーストが出現するという噂で締めくくられている。だが、クリスマスにちなんだ物語のタイトルと、おぞましい殺人事件の目撃という内容との食い違いには、キリスト教に対するいかにもハーディらしいと思われる態度だけでなく、キリスト教が抱えている罪意識というものの根源的なテーマも含んでいる。だがそれにもまして、そうした物語の内容を支えている視点や語りの技法に目を向けると、この作品はまた非常に興味深い面を持

っているのである1。

物語は、クリスマスの月明かりの夜という設定で始まり、いわゆる「起承転結」の「起承転」に沿う連続した3夜の物語に、22年の時を隔てた第4夜を「起承転結」の「結」とした、緊迫感を持ち同時に緊密な構成と伏線を張り巡らしていて、非常に良質な作品として仕上がっている。物語の語り手は、全知の語り手とおぼしき伝達者として次のように読者に語りかける。

The genial Justice of the Peace—now, alas, no more who made himself responsible for the facts of this story, used to begin in the good old-fashioned way with a bright moonlight night and a mysterious figure, an excellent stroke for an opening, even to this day, if well followed up. (187)<sup>2</sup>

この語り手は、語りの信頼性に対する責任というものを、物語ってくれた今は亡き治安判事にすべて転嫁することによって都合よく避けながら、聞き語り、伝聞として伝えられる物語が持つ面白さ、そして、治安判事の昔ながらの語り口、いわば語りの技法が、今でも聞く者を引き付けるというところを強調している。その点は、リアリズムが大きなうねりとなり始めた19世紀の後半のことを考えれば、ハーディのリアリズムに対する態度を示しているとも考えられて非常に興味深い。いわゆる写真的なリアリズムには否定的であったハーディにとって、「物語」というものは、結婚式帰りの客人たちを惹きつけたあの老水夫の「物語り」のように3、常に聞き手を惹きつけるに足る異様なものを含んでいなければならないのであって4、さらにそれを物語る方法や技法が伴ってこそ初めて聞き手の想像力は、リアリズムを超えて真実に迫ることができるというのである5。その点では、おぞましい殺人事件の目撃譚であるこの物語は、ハー

<sup>1</sup> 本論文は、拙論「視線と語りの方法:トマス・ハーディの「羊飼いが見たもの」」『大榎教授論文集』(大阪教育図書、2013 年 12 月)を敷衍し、新たにハーディのユーモア感覚についての視点を加えたものであり、物語の技法や視点の問題については重複する部分があることをお断りしておく。

<sup>&</sup>lt;sup>2</sup> テキストは、Thomas Hardy, Wessex Edition, *A Changed Man* (New York: AMS Press, 1984)を使用。以下引用はすべてこの版に依る。

<sup>&</sup>lt;sup>3</sup> Cf. Samuel Taylor Coleridge, *The Rime of the Ancient Mariner*, 1798.

<sup>&</sup>lt;sup>4</sup> Florence E. Hardy, *The Life of Thomas Hardy 1840-1928* (London and Basingstoke: Macmillan, 1975), 252.

<sup>&</sup>lt;sup>5</sup> Harold Orel (ed.), 'The Science of Fiction', *Thomas Hardy's Personal Writings* (London: Macmillan, 1967), 138.

ディの「小説の科学」で述べた物語の理論を実作の物語として具現化したもの とみなしてもよいだろう。

月明かりの夜に謎の人物が登場し、羊飼いが目にするものという設定により、クリスマスの時期に書かれたこの作品が聖書ルカ伝の一節を想起させるというのはおそらく計算済みのことであろうし、それによってまたハーディのキリスト教に対する思いをも察することができる。さらにタイトルに示されている定冠詞付きの「羊飼い」(the shepherd)という言葉が、「羊飼いの少年」と「老人の羊飼い」の、いったいどちらを指し示すのだろうかという素朴な疑問と、物語の語り手によって巧みに導かれる読者の思い込み、時を隔てて明らかにされる事実、そしてそれによるどんでん返しと驚きに満ちた結末、さらには過去の事件を聞き語る物語と、時を隔てた現在のその場所での回想との対比、いわば時間の断層の現れによって生まれる余韻とが、この物語における伏線と「物語り」に関わる巧みな仕掛けと相俟って優れた物語として仕上がっているのである。

П

「物語り」の技法として、この作品は、視点、もしくは視線を、全知の物語の語り手から登場人物に巧みに移動させることにより、同じものを見ていながらも、大人と子供の認識の違いという、冒頭で提起されている物語の信頼性という近代の物語論にも通ずる興味深い問題を提起している。だが、その前に、大人の世界、大人の目と、子供の世界、大人を怖がる子供の目という、ユーモラスな対比が、クリスマス物の物語らしく子供を登場させているために生じている、あるいは意図として用意されている物語と考えてよかろう。

クリスマスの時期が羊の産期にあたり、少年の羊飼いが、老人の羊飼いの言いつけで、荒野の目立たぬ一角に置かれた移動式の小さな羊飼いの小屋の中から、のぞき窓を通して外の羊たちの様子をうかがっている。語りの手の視点は、冒頭での治安判事の伝聞を伝えるという立場から、次第に治安判事と同じ位置に立ち、やがてすり替わるようにこの物語の語り手となっているが、同時に少年の視線に寄り添っていることが明らかである。

To the south, in the direction of the young shepherd's idle gaze, there rose one conspicuous object above the uniform moonlit plateau, and only one. It was a Druidical trilithon, consisting of three oblong stones in the form of a doorway, two on end, and one across as a lintel. Each stone had been worn, scratched, washed,

nibbled, split, and otherwise attacked by ten thousand different weathers; but now the blocks looked shapely and little the worse for wear, so beautifully were they silvered over by the light of the moon. The ruin was locally called the Devil's Door. (188)

羊飼いの少年は、この通称「悪魔の扉」、不気味なドルイッドの三石搭を背景 にしてひとりの男が立っていることに気づく。

He next looked from the opposite window, and here the case was different. The frost-facets glistened under the moon as before; an occasional furze bush showed as a dark spot on the same; and in the foreground stood the ghostly form of the trilithon. But in front of the trilithon stood a man. (189)

我々読者は、想像力を通して、語り手の誘導により少年の視線に沿いのぞき 穴を通してという限られた条件で、周囲の状況を把握することを求められてい る。その制限された視野という設定は、ある意味では、写真的で鳥瞰的なリア リズムに対するアンチテーゼというものであろうし、ハーディがいかに当時の リアリズムや物語の技巧に対して敏感であったかを示している例と考えてよい であろう。そしてその制限された視野、限られた視野というものが、羊飼いの 少年の理解力、認識の限界を暗示してもいるのである。

この男に加えて、ふたり目の人物が草原を横切って近づいてくるのを少年は見ることになるが、そのふたり目の人物は女であることがわかる。我々読者は、羊飼いの少年の目に沿って、のぞき窓からこのふたりの逢瀬と思われるものを盗み見る立場に置かれると同時に、少年の耳を通してふたりの会話をも盗み聞きする立場に置かれることになる。視線の動き、視覚による認識に加えて、聴覚による認識が加わることになるのである。羊飼いの少年の目と耳を通して、我々読者は、ふたりの間で交わされる会話から、男がフレッド・オグボーン(Fred Ogbourne)という若い大尉であり、女の方が公爵夫人のハリエット(Harriet)であることを知る。が、少年と同じように、のぞき見と盗み聞きの状況に置かれているが故に、完全には見えない、また完全には聞き取れないという事態が生じている。

A passing breeze blew away the murmur of the reply and several succeeding sentences, till the man's voice again became audible in the words, 'Harriet—truth

between us two! I have heard that the Duke does not treat you too, well.'

. . . . .

Another breeze broke the thread of discourse for a time. (190-1)

羊飼いの少年が見たり聞いたりしたものがいったい何であるかについては,後に登場するがっしりした体つきの男,つまりハリエットの夫である公爵が疑っていた,あらかじめ密かに計画された逢瀬かもしれないということが,我々読者に対してもひとつの可能性として示される。それについて,語り手は,次のようにコメントを加えている。

He released her, and they parted. The Duchess ran rapidly down the hill towards the outlying mansion of Shakeforest Towers, and when he had watched her out of sight, he turned and strode off in the opposite direction. All then was silent and empty as before.

Yet it was only for a moment. When they had quite departed, another shape appeared upon the scene. He came from behind the trilithon. He was a man of stouter build than the first, and wore the boots and spurs of a horseman. Two things were at once obvious from this phenomenon: that he had watched the interview between the Captain and the Duchess; and that, though he probably had seen every movement of the couple, including the embrace, he had been too remote to hear the reluctant words of the lady's conversation—or, indeed, any words at all—so that the meeting must have exhibited itself to his eye as the assignation of a pair of well-agreed lovers. But it was necessary that several years should elapse before the shepherd-boy was old enough to reason out this. (192-3)

羊飼いの少年の視線に沿いながら、大人である我々読者は、少年の認識とは異なって、公爵夫人とオグボーン大尉との密会に、夫の公爵と同様に不実の匂いを嗅ぎ取ってしまう。だがまた同時に、ふたりの会話やふたりの様子から、特に断片化された情報から、認識の修正をも求められている。それがこの物語の緊迫感を一層高めているのであり、夫に対して誠実であろうとする夫人ハリエットと、彼女の幼なじみでもある年若い大尉オグボーンに対する彼女の思いやりとが、公爵の邪推との食い違いを生じさせて、我々読者の最初の認識、語り手によって導かれた想像を修正せざるを得ないのではという思いを我々の胸の内に生じさせることとなる。そしてその我々読者の思いと公爵の思い込みと

の食い違いがサスペンスを生み出して物語を進展させる大きな力となり, 我々読者はその中に引き込まれていくのだといってよい。

第2夜において、公爵は邪推によって嫉妬心を募らせ、再び現れたオグボーン大尉を殺害する。羊飼いの少年は、この異様な出来事を、移動式の羊飼いの小屋の中からのぞき見て目撃することになる。彼の視線と耳は、当然ながら公爵の殺人と死体隠蔽に向けられるが、我々読者は、少年の限られた視野と断片的な音によって、恐ろしい殺人が行われたことを、さらに、オグボーン大尉の死体が「悪魔の扉」の向こうの穴熊の巣に隠されたことを推測し想像して知るのである。

The apathetic and taciturn boy was excited enough to run the risk of rising and looking from the window, but he could see nothing for the intervening furze boughs, both the men having gone round to the side. What took place in the few following moments he never exactly knew. He discerned portion of a shadow in quick muscular movement; then there was the fall of something on the grass; then there was stillness.

Two or three minutes later the Duke became visible round the corner of the hut, dragging by the collar the now inert body of the second man. The Duke dragged him across the open space towards the trilithon. Behind this ruin was a hollow, irregular spot, overgrown with furze and stunted thorns, and riddled by the old holes of badgers, its former inhabitants, who had now died out or departed. The Duke vanished into this depression with his burden, reappearing after the lapse of a few seconds. When he came forth he dragged nothing behind him. (196)

情報が断片的なものであれば、それらをつなぎ合わせて欠落しているものを補い、情報の全容を構成して推測しようとすることは、普段の生活の中でも我々がおこなっていることであり、そこには我々が生得の能力として持っている想像力(imagination)が働いている。その点では、ハーディが「小説の科学」('Science of Fiction')で自身の小説作法や物語論を展開し<sup>6</sup>、そこで、物事の本質というも

-

<sup>6</sup> Harold Orel, ed., 'The Science of Fiction,' *Thomas Hardy's Personal Writings* (London: Macmillan, 1967), 137-8. また, ハーディは, いわゆる'realism'について'realism is not art'として否定し, 伝統的な語りによる暗示の力が生み出す迫真性を強調している。Florence Emily Hardy, *The Life of Thomas Hardy 1840-1928* (London and Basingstoke: Macmillan, 1975)の 7月24日のメモ書き参照。

のを感得する「直感的な力」(the intuitive power)や「活きた心によって情報がもたらされる観察の力」(a power of observation informed by a living heart)に触れていることは、この物語で示されている情報の断片化という技巧的な面の本質を理解する上で重要なことである。

Ш

羊飼いの少年とともに殺人を「目撃した」我々読者は、その情報を抱きつつ、フレッド殺害の後、さらに自分の妻も殺害しようと決心して待っていたために 夜遅く帰ってきた公爵に対して、誠実な妻として振る舞うハリエットの姿に、 殺人者とその標的との間の緊迫したやりとりを聞くことになる。 殺人を犯して 屋敷に帰ってきた公爵を、妻のハリエットはひとりで出迎える。 嫉妬ゆえにフレッドを殺した公爵は、その不倫相手と考えている妻も殺害する気持ちであったために、無邪気な様子で誠実に迎えてくれる妻に対する態度がぎこちなくなるのである。

When the rider (=the Duke) approached the mansion a small turret door was quickly opened and a woman came out. As soon as she saw the horseman's outlines she ran forward into the moonlight to meet him.

'Ah dear—and are you come?' she said. 'I heard Hero's tread just when you rode over the hill, and I knew it in a moment. I would have come further if I had been aware—'

'Glad to see me, eh?'

'How can you ask that?'

'Well; it is a lovely night for meetings.'

'Yes, it is a lovely night.'

The Duke dismounted and stood by her side. 'Why should you have been listening at this time of night, and yet not expecting me?' he asked.

'Why, indeed! There is a strange story attached to that, which I must tell you at once. But why did you come a night sooner than you said you would come? I am rather sorry—I really am!' (shaking her head playfully) 'for as a surprise to you I had ordered a bonfire to be built, which was to be lighted on your arrival tomorrow; and now it is wasted. You can see the outline of it just out there.'

The Duke looked across to a spot of rising glade, and saw the faggots in a heap.

He then bent his eyes with a bland and puzzled air on the ground, 'What is this strange story you have to tell me that kept you awake?' he murmured.

'It is this—and it is really rather serious. My cousin Fred Ogbourne—Captain Ogbourne as he is now—was in his boyhood a great admirer of mine, as I think I have told you, though I was six years his senior. In strict truth, he was absurdly fond of me.'

'You have never told me of that before.'

'Then it was your sister I told—yes, it was. Well, you know I have not seen him for many years, and naturally I had quite forgotten his admiration of me in old times. But guess my surprise when the day before yesterday, I received a mysterious note bearing no address, and found on opening it that it came from him. The contents frightened me out of my wits. He had returned from Canada to his father's house, and conjured me by all he could think of to meet him at once. But I think I can repeat the exact words, though I will show it to you when we get indoors.

'That was all of it. Now, of course, I ought not to have gone, as it turned out, but that I did not think of then. I remembered his impetuous temper, and feared that something grievous was impending over his head, while he had not a friend in the world to help him, or anyone except myself to whom he would care to make his trouble known. So I wrapped myself up and went to Marlbury Downs at the time he had named. Don't you think I was courageous?'

'Very.'

'When I got there—but shall we not walk on; it is getting cold?' The Duke, however, did not move. 'When I got there he came, of course, as a full grown man and officer, and not as the lad that I had known him. When I saw him I was sorry I had come. I can hardly tell you how he behaved. What he wanted I don't know even now; it seemed to be no more than the mere meeting with me. He held me by the hand and waist—O so tight—and would not let me go till I had promised to meet him again. His manner was so strange and passionate that I was afraid of him in such a lonely place, and I promised to come. Then I escaped—then I ran home—and that's all. When the time drew on this evening for the appointment—which, of course, I never intended to keep—I felt uneasy, lest when he found I meant to disappoint him he would come on to the house; and that's why I could not sleep.

### But you are so silent!'

'I have had a long journey.'

'Then let us get into the house. Why did you come alone and unattended like this?'

'<u>It was my humour.</u>' (198-200)

引用が長くなったが、特に下線部で示した部分などでわかるように、殺意を抑えながら、出迎えてくれた妻にぎこちなく皮肉交じりに答えている公爵の態度が、読み手には非常に緊迫した空気を生み出している。そして同時に、妻ハリエットの言葉から、公爵も我々読者も、不倫として見なしていた「密会」が、実際にはそうでなかったということが明らかにされている。「密会」というつもりで言った公爵の'meetings'という言葉が、複数形となっているために、これまで幾度も「密会」がなされていたものと疑っている公爵の思いを表している。一方、公爵の妻ハリエットは、素直にまた誠実にその言葉を「出迎え」として捉えている。複数形であっても、これまでに何度も出迎えていたことであるからなんの不思議もないのである。こうした言葉の持つ二重の意味が、この緊迫した場面で大きな効果を発しているだけでなく、緊張がみなぎるためにかえってユーモラスな空気を広がらせているのである。

同様のやりとりが、ハリエットが嫌がる夫の公爵を誘って行った、マルベリー・ダウンズ(Marlbury Downs) の例の場所においてもなされている。

There was no help for it. Bill Mills was obliged to stay on duty, in the old shepherd's absence, this evening as before, or give up his post and living. He thought as bravely as he could of what lay behind the Devil's Door, but with no great success, and was therefore in a measure relieved, even if awe-stricken, when he saw the forms of the Duke and Duchess strolling across the frosted greensward. The Duchess was a few yards in front of her husband and tripped on lightly.

'<u>I tell you he has not thought it worth while to come again!</u>' the Duke insisted, as he stood still, reluctant to walk further.

'He is more likely to come and wait all night; and it would be harsh treatment to let him do it a second time.'

'He is not here; so turn and come home.'

'He seems not to be here, certainly; <u>I wonder if anything has happened to him.</u> If it has, I shall never forgive myself!'

The Duke, uneasily, 'O, no. He has some other engagement.'

- 'That is very unlikely.'
- 'Or perhaps he has found the distance too far.'
- 'Nor is that probable.'
- 'Then he may have thought better of it.'
- 'Yes, he may have thought better of it; if, indeed, he is not here all the time—somewhere in the hollow behind the Devil's Door. Let us go and see; it will serve him right to surprise him.'
  - 'O, he's not there.'
  - 'He may be lying very quiet because of you,' she said archly.
  - 'O, no-not because of me!'
- 'Come, then. I declare, dearest, <u>you lag like an unwilling schoolboy to-night</u>, and there's no responsiveness in you! You are jealous of that poor lad, and it is quite absurd of you.'
  - 'I'll come! I'll come! Say no more, Harriet!' And they crossed over the green.

Wondering what they would do, the young shepherd left the hut, and doubled behind the belt of furze, intending to stand near the trilithon unperceived. But, in crossing the few yards of open ground he was for a moment exposed to view.

'Ah, I see him at last!' said the Duchess.

'See him!' said the Duke. 'Where?'

'By the Devil's Door; don't you notice a figure there? Ah, my poor lover-cousin, won't you catch it now?' And she laughed half-pityingly. 'But what's the matter?' she asked, turning to her husband.

'It is not he!' said the Duke hoarsely. 'It can't be he!'

'No, it is not he. It is too small for him. It is a boy.'

'Ah, I thought so! Boy, come here.'

The youthful shepherd advanced with apprehension.

- 'What are you doing here?'
- 'Keeping sheep, your Grace.'
- 'Ah, you know me! Do you keep sheep here every night?'
- 'Off and on, my Lord Duke.'
- 'And what have you seen here to-night or last night?' inquired the Duchess. 'Any person waiting or walking about?'

The boy was silent.

'He has seen nothing,' interrupted her husband, his eyes so forbiddingly fixed on the boy that they seemed to shine like points of fire. 'Come, let us go. The air is too keen to stand in long.' (201-2)

ここでも、無邪気なハリエットの言葉が、誤解ゆえに衝動的に殺人を犯してしまった公爵の罪の意識と後悔の気持ちを突くべく、痛烈で皮肉な言葉遊びのように目まぐるしく展開している。特に下線部で強調したところは、ハリエットの言葉に公爵が動揺しうろたえている様は、ハリエットの言うように、咎められ叱られながら必死にごまかそうとして「ぐずっている学校の生徒」(an unwilling schoolboy)のようである。ジュピターの神(Jove)のように村人たちに恐れられていた公爵が7、ここ妻の前ではまるで母親にとっちめられている子供の態を為しているのである。そして、おぞましい殺人者である公爵が「まるでぐずっている学校の生徒みたい」(like an unwilling schoolboy)になってしまうこの落差がまた、得も言われぬユーモアを醸し出している。

フレッドが夫によって殺害されていることなどまったく知らないハリエットが、無邪気に「あなたのせいでじっと身を潜めているのかもしれないわ」(He may be lying very quiet because of you!)と言った言葉にある'lying very quiet'は、公爵には「死んで静かに横たわっている」と聞こえている。「あなたのせいで」も公爵には、「あなたが殺したせいで」と聞こえてしまい、慌てて「おれのせいじゃない」(O, no-not because of me!)と、必要もないのに語気を強めて否定するのである。「あ、三石塔のそばに彼を見つけた」(Ah, I see him at last!)という妻の言葉も、公爵には、隠した死体が見つかってしまったものとびくびくしながら聞いている。公爵がしたのはおぞましい殺人という行為であるが、それが妻にばれないように、殺意を向けた妻に悟られないように狼狽し腐心している公爵が、殺人という異様な緊張の中でむしろコミカルに浮かび上がっているのである。

IV

この作品の面白さ、おかしみは、いかにも恐ろしい公爵と、その公爵が犯した殺人を目撃した羊飼いの少年とのやりとりにも見られる。不倫の疑念を向けた妻に誠実を示され、さらには妻に誘われ密会の約束の場所に連れられた公爵は、そこで、羊飼いの少年の存在に気づき、荒神のごとくに羊飼いの少年を詰

<sup>&</sup>lt;sup>7</sup> T. Hardy, 195.

問するのである。

The nobleman, on his part, seemed to have eyes no less sharp than the boy's, for he instantly recognized the latter among the ewes, and came straight towards him.

'Are you the shepherd lad I spoke to a short time ago?'

'I be, my Lord Duke.'

'Now listen to me. Her Grace asked you what you had seen this last night or two up here, and you made no reply. I now ask the same thing, and you need not be afraid to answer. Have you seen anything strange these nights you have been watching here?'

'My Lord Duke, I be a poor heedless boy, and what I see I don't bear in mind.'

'I ask you again,' said the Duke, coming nearer, have you seen anything strange these nights you have been watching here?'

'O, my Lord Duke! I be but the under-shepherd boy, and my father he was but your humble Grace's hedger, and my mother only the cinder-woman in the back-yard! If all asleep when left alone, and <u>I see nothing at all!</u>'

The Duke grasped the boy by the shoulder, and, directly impending over him stared down into his face, 'Did you see anything strange done here last night, I say?'

'O, my Lord Duke, have mercy, and <u>don't stab me!</u>' cried the shepherd, falling on his knees. 'I have never seen you walking here, or riding here, or lying-in-wait for a man, or dragging a heavy load!'

'H'm!' said his interrogator, grimly, relaxing his hold. <u>It is well to know that you have never seen those things.</u> Now, which would you rather—see me do those things now, or keep a secret all your life?'

'Keep a secret, my Lord Duke!'

羊飼いの少年が、恐怖のあまり「何も見ていません」というつもりだったのか「何も見ません」(I see nothing at all!)と、現在形で否定することの滑稽さ、そして「ナイフで刺さないでください」(don't stab me!)とか、「閣下がここに歩いて来られたことも、馬に乗って来られたことも、待ち伏せをされていたことも、何か重いものを引きずっていたことも、決して何も見ていません」(I have never seen you walking here, or riding here, or lying-in-wait for a man, or dragging a heavy load!)と、語るに落ちるというべきなのか、前述したように、実際には断片的に

しか見ていなかったはずなのに、公爵の凄みにおののき、思わずすべて見てしまったと口走ってしまうこの場面は、緊迫した中でも、この上なくも面白い場面となっている。

羊飼いの少年にとってはもちろん、村の人々にとっては、神々の王ジュピター(Jove)にもたとえられる恐ろしい公爵は、この少年が自分の殺人を目撃したことを知り、ドルイッドの三石塔を祭壇に見立てて少年に誓いをたてさせる。

'That's well—very well. But it's not enough. Come here.' He took the boy across to the trilithon, and made him kneel down.

'Now, this was once a holy place,' resumed the Duke. 'An altar stood here, erected to a venerable family of gods, who were known and talked of long before the God we know now. So that an oath sworn here is doubly an oath. Say this after me: "May all the host above—angels and archangels, and principalities and powers—punish me; may I be tormented wherever I am—in the house or in the garden, in the fields or in the roads, in church or in chapel, at home or abroad, on land or at sea; may I be afflicted in eating and in drinking, in growing up and in growing old, in living and dying, inwardly and outwardly, and for always, if I ever speak of my life as a shepherd-boy, or of what I have seen done on this Marlbury Down. So be it, and so let it be. Amen and a men." Now kiss the stone.'

The trembling boy repeated the words, and kissed the stone, as desired.

The Duke led him off by the hand. That night the junior shepherd slept in Shakeforest Towers, and the next day he was sent away for tuition to a remote village. Thence he went to a preparatory establishment, and in due course to a public school. (204-5)

ジュピターにもたとえられる公爵は、異教の遺跡を前にし、少年の無知をいいことにありとあらゆる神々を引き合いに出し、それにキリスト教の神やら天使たち、その他少年が畏れそうな神々の地位に匹敵する者たちを口にして、秘密をばらすようなことがあれば、天罰が下ると脅す。そして最後に三石塔に向かって誓いの言葉を繰り返させ、何故か「アーメン」と唱えさせて締めくくりさらに念を入れて石にキスをさせて誓わせる。この場面など、冷静に大人の立場で考えれば、無知で無教養の幼い子供相手にでたらめを並べ立てた、滑稽極まりない場面となっているのである。そのうえに、異教的な雰囲気にキリスト教の要素を交え、さらにまた「羊飼いが見たもの」という、聖書のエピソード

を想起させるタイトルとが渾然一体となって、まさにハーディ的な世界が凝縮 され作り出されている感もある。

聖書のルカ伝にある羊飼いが見たものは彼らの救い主となる御子であるが, 羊飼いの少年が見たものは、村人たちにとっては恐ろしい暴虐極まりないギリシャ神のような存在の公爵である。その恐ろしい公爵は、少年に対し殺人の罪を犯したことを秘密にして隠蔽するよう強要しつつ、その見返りとして母親ともども生活を助け十分な教育を施すことを約束してくれる者でもある。その意味で、少年にとって公爵は、貧困の下層階級から救い出してくれる救い主であるけれども、結果としては、殺人の目撃の事実を隠蔽することによって、少年は公爵の共犯者となることを意味している。

タイトルにある「羊飼い」は、実はこの少年の羊飼いだけではないことが、22年の年月を経ての第4夜に明らかになる。定冠詞が付せられた「羊飼い」という言葉は、読む者に、物語の状況からほぼ自動的に少年の羊飼いを指し示すよう仕組まれていたといってもよかろうが、ここに至って、ほぼ背景に引き下がって姿を消していた老羊飼いであることが明らかにされるのである。羊飼いの少年に誓いを立てさせて殺人の罪を隠蔽していた公爵は、老羊飼いの最期の告白によって秘密が露わになることを恐れ、ほとんど自ら命を絶つような最期を遂げる。まるでサスペンスに満ちた推理小説のようなどんでん返しを用意しつつ、少年の羊飼いが見たものと、老羊飼いが見たものとが、いわば視線が重なり合うように一致すると同時に、それが聖書から想起される救い主ではなく殺人者であるという皮肉、そして殺人を犯した公爵に心にのしかかっていたことが我々読者に示されている。罪というものをどう捉えるかは、またハーディの他の作品でも扱われていることだが、ここに近代的な心理小説の面をみることもできるだろう。

羊飼いの見た殺人が行われた荒野には、今でも怪しい人の影や、凶器のきらめき、死体を引きずる男の影が見られるという、クリスマスのゴースト物の物語にふさわしい締めくくりをしながら、同時にそんな現象や噂については「決して確かな証拠があるわけではない」(But of these things there is no certain testimony, 210)と結ばれたこの作品は、冒頭と同じように、物語の信頼性をあやふやにしつつも、昔ながらの語り口の物語空間にわれわれ読者を解き放っているのである。非常に巧みに構成され、羊飼いの「見た」ものという、その視線に沿いながら「物語り」の技法の可能性を示したかに思われるこの作品は、クリスティン・ブラディも示唆しているように、ハーディの優れた短編のひとつ

として充分に見なすことができるが、同時に、殺人の目撃という異様な雰囲気の中で、緊迫した状況に言葉遊びにも似た、言葉が持つ意味の二重性を巧みに操るハーディらしいユーモアを忍ばせた、また別の側面を持った物語としてみなすことができるのである<sup>8</sup>。

### 参考文献:

Booth, Wayne C. The Rhetoric of Fiction. Chicago: University of Chicago Press, 1983.

Brady, Kristin. Short Stories of Thomas Hardy: Tales of Past and Present. London: Macmillan, 1982.

Hardy, Florence E. *The Life of Thomas Hardy 1840-1928*. London and Basingstoke: Macmillan, 1975.

Hardy, Thomas Wessex Edition: A Changed Man. New York, AMS Press 1984.

Lodge, David. The Art of Fiction. London: Penguin Books, 1992.

Orel, Harold ed. Thomas Hardy's Personal Writings. London: Macmillan, 1967.

\_

<sup>&</sup>lt;sup>8</sup> Kristin Brady, *The Short Stories of Thomas Hardy: Tales of Past and Present* (London and Basingstoke: The Macmillan Press Ltd., 1982), 166.